書　評

金田章裕　著
『江戸・明治の古地図からみた町と村』
敬文舎　2017年 2月　319頁　2,400円＋税

本書は，敬文舎が発行している「日本歴史　私の最新講義」シリーズの一冊である。

著者である金田章裕氏については，ここで振り返る必要もないであろうが，専門である古代・中世の歴史地理学に加え，本書の「あとがき」にあるように，近世・近代の古地図や地籍図などについても，自治体史をはじめ，専門書や新書などに多数の著作をなしていることは，明記しておきたい。それは，この書を著すに際して，著者のかつての研究成果が，多く採り入れられているからである。その意味では，本書は単に概説書にとどまるものではないともいえよう。

さて，本書の意図するところは，「まえがき」の後段にあるように，「町や村を描いた大縮尺の古地図の概要を理解し，それらを活用していただくための，ひとつの試み」で，「人びとの生活の場である町や村の古地図を知るための一助，あるいはその導入」であろう。

たしかに，通読してみると，地域は異にするものの，随所に人びとの生きた場（生活の痕跡といってもよいだろう）や，空間認識などが適宜紹介されており，興味深く読むことができる一冊となっている。そして，平易に書かれた文章からは，大縮尺の古地図を読み解くための入門書として，筆者の意図する役割を充分に果たしているものと思われる。

本書は，

まえがき
第一章　町や村の歴史と古地図
第二章　大縮尺図の表現
第三章　近世の都市図
第四章　刊行都市図の特性－京・江戸・大坂
第五章　近世の村図－河内国の村々
第六章　明治の古地図－近江国犬上郡とその周辺
第七章　大縮尺の古地図と研究
第八章　古地図と災害
あとがき

で構成されている。

まず，本書の各章の概要について簡単にふれることにしたい。

第一章では，本書が取扱った大縮尺図の意味を取り上げることからはじめている。そして，近世の幕府撰国絵図（中縮尺図）をもとにしながら，それぞれの事業の特性を紹介する。さらに，第五章で論じる近世の村図を理解するための前提作業として，河内国正保国絵図から町や村の表現についてふれている。

そして，第二章では，大縮尺図である村絵図に描かれた地名や地筆，地目などについて，古代の土地制度が確立した時期から，その成立と変遷を具体的に概観する。筆者の最も専門とするところでもあり，要点が簡潔にまとめられている。

この二章が，大縮尺図を読み解くための導入部分であり，以降で具体的にふれられる村絵図などを理解する上では，読者は必読するべき箇所といえよう。

第三章では，近世都市の代表でもある城下町を取り上げて，矢守一彦が提唱した都市プラン研究（五類型の変容系列）の紹介から筆を起こす。この都市プランの理解に基づき，彦根の城郭以外の各要素を表現する天保７年（1836）の「彦根御城下惣絵図」から，武家屋敷の配置，町屋と街道の特徴にふれる。続いて，寛文７年（1667）と寛文８年の２舗の金沢城下図からはその城下の構造を，熊本では「熊本屋舗割下絵図」と「平山城肥後国熊本城廻絵図」の２舗の絵図から街路パターンの方位について論じている。いずれも，大藩の城下絵図を事例とした研究である。

第四章は，江戸時代にその殆どといってよいほどが生み出された，京・江戸・大坂の三都の刊行都市図の紹介である。ここでは，最古の刊行都市図が残される京都での刊行図の展開過程をみた上で，江戸，大坂のそれぞれの流れを概観している。

つまり，この二章で，江戸時代を代表する都市である，城下絵図や三都の刊行都市図のあらましが取り上げられていることになる。

第五章では，河内国丹北・丹南・志紀郡の村々

の多様な村図の類型と表現内容が紹介されている。ここでは，単に村絵図から空間認識を問うだけにとどまらず，やや広域を図示する用水路に関わる図にも論が及んでいるのは，著者が編纂委員として携わった『藤井寺市史』[1] の成果が反映されているものと考えられる。

第六章も，著者が刊行に携わった『彦根 明治の古地図』[2] に依拠したものである。現在の彦根市域に含まれる明治期の各種地籍図類を取り上げ，犬上郡の村落の耕地状況などが詳らかにされる。また，彦根城下町の個別町の「区分図」などからは，まちの様相が明らかにされており興味深い。

以上の二章は，近世・近代の村絵図の具体的な読み解きであり，それぞれに多くの頁が割かれている。実践編であり，かつ本書の核心部分，といってもよいであろう。

第七章は，地割形態や地番，筆界，小字地名を記載する地籍図をもとにした研究例の提示である。古墳の周濠の推定，村落形態の復原推定，土地利用と土地所有の地筆との関係，小字地名による景観変遷などが解説される。さらに，小字地名の変化と地割形態などの表現の歪みについて，「宇治郷総絵図」をもとに詳説している。また，第六章で取り上げた，近江国犬上郡を含む彦根市域の条理プランの復原なども示されている。

第八章は，それまでの大縮図の町絵図や村絵図ではなく，古代・中世・近世の洪水痕跡の表現例や，地震・山崩れ・水害を主題とした古地図が読み解かれる。災害の痕跡は，土地の形状や地名に残されている場合も少なくないが，非常態の古地図からは，空間情報の説明と記録にも活用できる事例を示してくれている。

第七～八章が，歴史地理学が地図資料をもとに展開してきた景観復原研究を具体的に論じた内容で，さらなる実践編といったところであろう。

このように，多彩な内容を持った「最新講義」からなる本書であるが，勘違いやケアレスミスと思われる記述も少なくない。幅広く読まれるべき著作と考えるので，誤解や勘違いと思われる点を書きとどめるとともに，不躾ながら，要望などを列記することにしたい。ただ，筆者の専門とするところ，関心の趣くところ，が中心となっていることをお断りしておきたい。

まず，全体的な流れとして，違和感を抱いたことがある。それは，第三章と第四章で，「城下絵図」と三都の刊行都市図が取り上げられている点である。第一章や第二章が，本書の理解を深めるための概論とするならば，村（絵図）の理解に重点をおいていることは明らかである。それならば，続いて第五章や第六章の記述に及んだほうが，スムーズに理解が図れたのではないかと思われる。

さらに，氏が「日本における古地図の機能と表現対象」(19頁）として図を掲げたように，「城下絵図」や刊行都市図は「小地域」を対象としたものであろう。それならば，同図に盛り込んである内裏図や参詣図，町絵図などにも言及すべきではなかっただろうか。これらの図は，城下町の絵図や三都の刊行都市図よりは，明らかに大縮尺であると目される。あくまでも，第三章や第四章が不要という論議でなく，大縮尺図の理解を，より補強するという点においてである。

次に，各章についてふれることにしたい。

第一章では，著者も小縮尺図である国絵図の村や町の描写などの限界は指摘しているが，できることならば，それを図版によって具体的に示す必要性はなかったであろうか。後述するように，河内正保国絵図は写本が残されているにすぎず，この図は村高が記載されないなど，幕府が求めた絵図細則基準が充分に反映されてはいない。できるならば，現存する河内元禄国絵図や河内天保国絵図の当該部分を掲示して欲しかったところである。なお，著書が引用したこの国絵図に関しては，「河内国正保国絵図は宮内庁書陵部に所蔵」(28頁）とする。おそらく，著者は『藤井寺市史』[3] 収録図を利用したのであろう。同書では，正保国絵図，元禄国絵図，天保国絵図を全て「宮内庁書陵部所蔵」としているが，これらは国立公文書館内閣文庫の所蔵である。ちなみに，河内国の正保国絵図写は，そのほかに臼杵市立臼杵図書館に現存が確認されている[4]。

また，27頁には「伊能忠敬の作製した「大日本沿海輿地全図」（文政四年〈一八二一〉完成）は沿岸測量による日本図であったが，相前後して作製された石黒の加賀藩三か国の各郡図（文政七年完成）は，道線法と交会法による詳細で正確な測量に基づく内陸図であった」とする。たしかに，氏が指摘するように，「大日本沿海輿地全図」は日

本の形を図示する点では沿岸測量かもしれない。しかし，本来の目的であった主要地点の緯度などを測定することと，街道測量も行っていたことを無視してはならないであろう。また，伊能の測量も下図や完成図にみられるように，各地点の精確さを期すために，道線法と交会法を用いるなど，当時の測量技術としては一般的なものであった。

第二章では，55頁に「明治二一年四月二五日に市制と町村制が施行されると，翌二二年から活発に村の合併が行われた」とあるが，市制と町村制は上記の日に法律第１号として公布され，明治22年（1889）４月から順次施行されたのが，その流れである。

第三章では，109頁に前段の文章をうけて，「「新板大坂之図」の版元は林吉永であった。大阪城を上に絵画的に描き，大阪湾との間の街区を，初期の京都図と同様に黒く刷出している」とする。氏がいうように，吉永の名を版元として掲げた「新板大坂之図」もあるが，この図は，明暦3年（1657）の河野道清板を伏見屋が継承し，さらに吉永の手にわたったものである[5]。さらに，図版として次頁に掲げた延享年間（1744～48）の「新板大坂之図」は街区が「黒く刷出」されておらず，白抜きとなっている図である。また，111頁に「寛政年間（一七八九～一八〇一）ごろからは播磨屋九兵衛版が全盛期を迎えた。この後幕末までに，十七種，一〇〇舗を超す大坂図が刊行された」としている。この数量については，かつて佐古慶三が提示した「大阪 増修改正大阪地図」[6]に依拠しているとみられるが，これは「新板大坂之図」以降幕末までの刊行大坂図の数値である。

評者は，関西に居住しているゆえに，第五章や第六章でふれる，河内国や近江国の村落の位置関係をおぼろげながら把握はできる。しかし，その他の地域に居住している読者はどうであろう。大縮尺図が本書のテーマの一つであるが，小縮尺図を提示し，村落の位置関係などを図示することが，本書の意義を高めるためには，必要であったと考えられる。

また，本旨には直接関係しないかもしれないが，第五章143頁に「しかも，「小山村領内絵図」が大和川新河道開削の延宝六年（一六七八）以前であるから，この道・境界が一七世紀まで遡ることは間違いない」としているが，大和川の付け替えは，元禄16年（1703）のことである。

参考文献の掲出は，先行研究をたどる意味では重要であることに異論はないであろう。しかし，第二章に「戸祭由美夫によれば」（43頁）とあるが，それは第一章に掲げられている。前述した佐古慶三については名前が掲げられていないが，第七章227頁に「竹本裕子がそれを収集，集成した」と引用者の名前が文中に引かれていても，参考文献にみあたらないのは残念である。「古地図を理解し，活用するため」の素材として，是非留意して欲しかった事柄である。

研究者のみならず，一般の読者層も広く視野に入れた古地図関係の著作というと，古くは織田武雄『地図の歴史』（講談社，1973）があり，矢守一彦『都市図の歴史 日本編』（講談社，1974），同『都市図の歴史 世界編』（講談社，1975）などが掲げられるところである。また，著者共著である『日本地図史』（吉川弘文館，2012）もこれに該当しよう。われわれに身近な「大縮尺の古地図」という新たな切り口で，古地図資料の活用，そして魅力を伝えた本書は，これらに比肩するといっても過言ではないであろう。

歴史地理学や地図史を専攻する学生や院生，さらには地域史を学ぶ方々には，是非，一読して欲しい著作である。

〔注〕

1）藤井寺市史編さん委員会編『藤井寺市史 第10巻 資料編八上』藤井寺市，1991。
2）彦根市史編集委員会編『彦根 明治の古地図 １～３』彦根市，2001～2003。
3）前掲注１）。
4）国絵図研究会編『国絵図の世界』柏書房，2005，370頁。
5）拙稿「近世刊行大坂図の潮流」脇田修監修，小野田一幸・上杉和央編『近世刊行大坂図集成』創元社，2015，論文編８頁。
6）佐古慶三「大阪 増修改正大阪地図」（原田伴彦・西川幸治・矢守一彦編『近畿の市街古図』鹿島出版会，1978，11頁。前掲注４）では，刊行大坂図について，30系統182種としたが，当然のことながら，この数量も暫定的なものである。

（小野田一幸）